

セクターローテーション分析

基準日: 2026年7月

作成: A. I. P 株式会社

日銀追加利上げ観測とFRBのタカ派転換で「金融・資本財・素材」優位、AI相場は調整一服待ち

1 景気サイクルの現在地（2026年7月現在）

① 日米金融政策の分岐加速

日銀は6月会合で政策金利を0.75%から1.00%へ引き上げ（1995年以来約31年ぶりの水準）、7月または年内の追加利上げを市場は織り込みつつある。一方の米FRBはFF金利3.50～3.75%を維持しつつ、パウエル後任のウォーシュ議長がインフレの高止まりに言及したことで7月利上げ確率が4割、9月までは7割まで浮上。両国が同時にタカ派化する珍しい局面。

② 景気サイクルは「拡大後期」入り

米ISM非製造業指数は53.0（前月54.5）に鈍化するも拡大圏を維持。日本は高市政権の積極財政とAI・半導体投資が下支えし、野村證券は2026年末の日経平均目標を68,000円へ上方修正。後期サイクルでは金融・資本財・素材など「バリュー・質」重視セクターが優位になりやすい。

③ 中東情勢とAI一本足からの資金分散

半導体関連株は中東情勢の緊迫化を背景に短期調整局面入り。AI一本足打法から銀行・資本財・防衛関連などへ資金ローテーションが広がり始めている。構造的なAI投資需要自体は健在なため、押し目は買いの好機と位置付ける。

④ 金利・為替：ドル円162円台、日米金利差はなお高水準

ドル円は中東情勢の緊迫化に伴うオイルマネー・有事のドル買いも重なり162円台前半で推移。日銀が政策金利を1.00%へ引き上げた後もFRBがFF金利3.50～3.75%を維持しタカ派姿勢を強めていることで日米金利差は高止まりし、円安圧力が根強い。輸出関連（情報技術・資本財）には追い風となる一方、円安を通じたインフレ再加速が日銀の追加利上げペースを早める可能性もあり、金融セクターには両面の材料となる。

2 セクター判定表（11セクター）

セクター	判定	根拠
情報技術（半導体・AI）	強気	中東情勢を受けた短期調整中だが、AI投資サイクルの構造的強さは不変。押し目は拾いたい局面。
金融（銀行・保険）	強気	日銀追加利上げが利ざや改善に直結。バリュエーションも歴史的に見て相対的に割安で資金流入が続く。
ヘルスケア	中立	ディフェンシブ性はあるが明確な材料難。個別銘柄のカタリスト待ち。
一般消費財（自動車・小売）	強気	インバウンド消費の復調とEC・サブスク領域の成長が支え。米関税動向には注意。
生活必需品	中立	インフレ下の価格転嫁力はあるが、後期サイクルでのアウトパフォームは限定的。
資本財（機械・防衛・電子部品）	強気	AI設備投資の裾野拡大と防衛需要の高まりで受注環境が良好。半導体からの資金シフト先として選好。
エネルギー	中立	中東情勢の不安定化が資源価格を下支えするが、方向感は限定的。
素材（化学・鉄鋼）	強気	インフラ投資・防衛関連の需要増と、割安バリュエーションからの見直し買いが続く。

セクター	判定	根拠
公益事業	弱気	金利上昇局面ではディフェンシブ性のメリットが相殺されやすい。
不動産（REIT含む）	中立	金利上昇は逆風だが、NAV倍率の割安さと賃料上昇（内部成長）が下支え。詳細はREITポートフォリオ分析を参照。
通信サービス	弱気	成長期待の乏しさから資金流出が続く。

3 今月のオーバーウェイト推奨

金融（銀行・保険）

日銀の追加利上げ観測を追い風に、預貸金利ざやの改善が期待できる局面。歴史的なバリュエーションの割安さも残っており、セクターローテーションの本命として最上位に位置付ける。

資本財（機械・防衛・電子部品）

AI関連設備投資の裾野拡大に加え、防衛予算の増額観測が追い風。半導体そのものから周辺装置・部品メーカーへの資金シフト先として選好。

情報技術（半導体・AI）

短期的には中東情勢を背景とした調整局面にあるが、構造的なAI投資需要は不変。押し目は中長期目線での買い場と判断する。

4 アンダーウェイト（回避推奨）

公益事業

金利上昇局面ではディフェンシブ性というメリットが相殺されやすく、配当利回りの相対的な魅力度も低下している。

通信サービス

国内市場は成長期待が乏しく、他のディフェンシブセクター（生活必需品等）と比較しても資金の逃避先としての妙味が薄い。



本資料は情報提供を目的としたものであり、特定の投資行動を勧誘・保証するものではありません。投資の最終決定はご自身の判断で行ってください。
A.I.P株式会社 2026年7月作成